

(3) (食べ物)

深田久弥の食べ物の嗜好で不快に思ったことがある。食べ物という些細なことなのだが、気になったので記したい。



深田久弥は「深田久弥の山さまざま」の「剣岳」の項で、ひとりで剣岳に行き、剣沢の河原で昼食をとった際のことを、「しかし、経木に包んだ二つの握り飯を見ると、僕はもう食欲を失った。どこの山小屋でも弁当に作ってくれるあの米のかたまりほど僕に味気ないものはない。あれを完全に平らげたことは一度もない。大てい次の泊まり場に到着してそっくりそのまま宿の人に渡すのが常である。

今度もその握り飯を一かじりしただけでよした。ほかに食べる物もないが、さして空腹も感じない。立ち上がって再び歩き出した」と記している。

剣岳山行は昭和24年の夏頃に行われた。越後湯沢から昭和22年9月に郷里に移り、昭和26年5月に金沢市に転居する間のことである。

昭和24年頃わが国の食糧事情はどうだったのか。自分の小さな頃、米は配給制で米穀通帳を用いていた記憶がある。米粒一つでもお椀に付けていると注意される躰を受けていたことを母の面影とともに思いだされる。深田久弥は米ではなく「米のかたまり」が嫌いだったのか。このくだりに読み至った時、理解できず唖然とした。山小屋の人が朝早く起きて握ってくれたのに、一齧りしただけという。それなら受け取る前に遠慮すべきである。山での銀シャリ(お釈迦様の骨)ほど貴重なものはない。この稚気たるや開いた口が塞がらない。深田久弥は昭和19年3月に召集されて中国に渡り、敗戦後虜囚となり、昭和21年7月に復員した経験から、食料の貴重なことは骨身に浸みているはずである。越後湯沢にいた時も、「時節柄、(山行)途中の百姓家でジャガイモを買いこんで…」とか「熱い芋粥をすすって、早朝宿をでる」と記している。とすれば、余程おにぎりが嫌いだったというべきか。しかし、その行いは稚児の振る舞いではないか。



深田記念公園

深田久弥は食べ物について「名もなき山へ」の「かきと鯛」の項で「私は何でも食い、何でも飲む。甘いものも辛いものも。だから戦争に行っても困らなかった。田んぼの水を飲み蛙やイナゴを食った」と記している。蛙を食べる人がおにぎりを食べないなど信じられない。おにぎりが嫌いなら、夏に沢山いる蛙の丸焼きを経木に包んで貰えばよかったのに、と言うのは失礼至極の失言であろう。

深田久弥が亡くなる数時間前に口にした食べ物は、好きなアンパンである。茅ヶ岳の深田記念公園で行われる深田祭の参集者にアンパンが配られるのは、このことに由来している由である。

(つづく)